近江の仏画

はじめに

仏画とは、仏教的意味を含む仏教絵画の省略形をいいます。このようにいいますといかにもむずかしそうですが、ただ単に仏教絵画といってしまえば、あまりにもおおまかすぎて、その中には建造物などの単なる装飾的なものまでも、その範囲に入ってしまいます。そこで「仏教的意味を含む」という註釈をつけることによって、おのずとその範囲も決まってくるのです。

さて、その仏画ですが、独特の雰囲気で、宗教的なきびしさというものが画面から感じられ、何か近づきにくいところがあり、仏教的知識をもっていないと十分な理解もむずかしいものです。そのため一般の人々にとって仏画はわかりにくいものとして、敬遠されがちです。それは、仏画がふつうの世俗画とちがって、本来鑑賞を目的として描かれたものではなく、仏教信仰の発展にともなってその必要性から生み出され、仏教教理の教化用とか本尊的な礼拝用とかの神聖な用途にあてられるための絵画であるからです。主として、おがまれる仏教諸尊の像または、これを中心としたものであってみれば、その表現にきびしさや崇高さが優先的に求められ、結果として神秘的となり、幻想的ともなるのは自然で、そういったところに仏画の魅力といったものが感じられるように思われます。

千手観音二十八部衆像〔部分〕　高島町大清寺蔵

一般に芸術作品は、見るものではなく感ずるものであるといわれます。これは鑑賞において、解説などによる先入観をすてて、美的直観によるべきことを強調した意味ですが、それはそれとして、解説や手引きが全く不要ということにはならないと思います。まして仏画のように、宗教的な意味と用途とを持つものであってみれば、ふつうの鑑賞画以上に予備的な知識が必要となります。

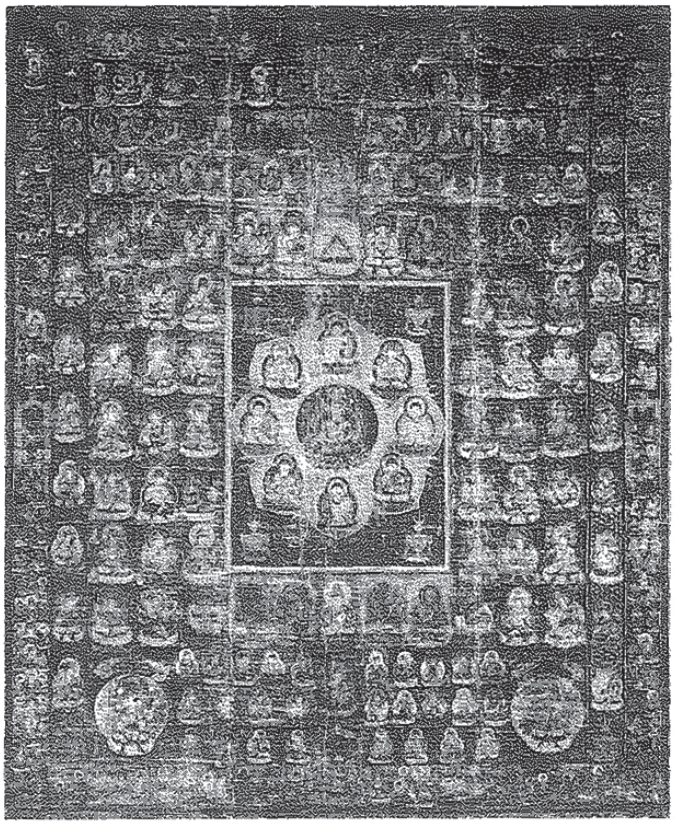
仏画の多様性

滋賀県の昭和58年３月31日現在の国指定重要文化財（国宝を含む）総件数 762件（内国

1983．9．30

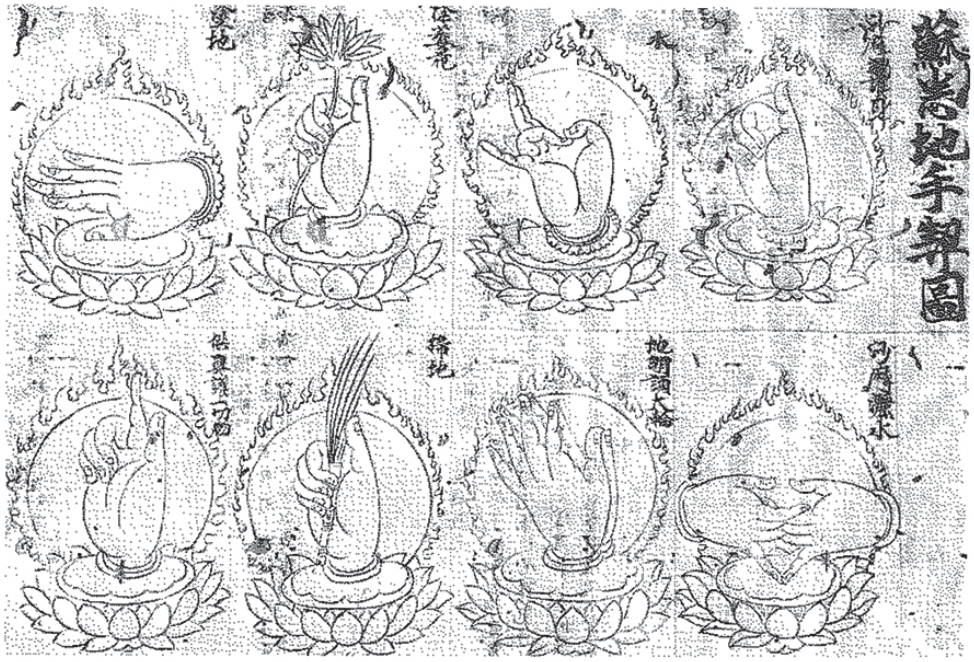
財団法人　滋賀県文化財保護協会

宝55件）のうち、絵画は92件（内国宝４件）で、そのうち仏画が82件も占めています。いかに仏画の占める割合が大きいかがわかると思います。これは国指定の文化財に関する数値ですが、未指定のものもあわせるとその数はさらにふえることになります。これはいうまでもなく、我国が大陸（中国）の進んだ仏教文化を受け入れ、これを熱心に信奉し、仏教のためのすぐれた美術を展開させた結果にほかなりません。絵画にかぎらず、彫刻・工芸・書籍などの各分野にわたって、仏教関係のものがいかに多く制作されたかは、現存する文化財などがよく物語っています。それにしても、仏画が絹や紙のような脆弱な材質を用い、多湿な風土の中に長年おかれてきたにもかかわらず、多数のこされてきたことは、寺院という特殊な場所で伝存されてきたことと、仏教が人々の心の糧として、上下を問わず厚い信仰を受けてきたあかしともいえます。



両界曼荼羅図〔胎蔵界〕

多くの仏画が残されているということは、またそれだけ種類も多く、その描かれた主題にいたっては、まことに多種多様です。また仏画の多様性は、単に内容ばかりでなく、その材質・形状や機能・用途などの面からもこれをながめてゆくことが必要です。まず材質からみた場合ですが、土質のもの（壁画など）木質のもの（板絵など）・繊維質のもの（絹絵など）・紙質のもの（紙絵など）などに分けることができます。機能・用途別としては、荘厳用・礼拝用・教化用などに、主題別としては、一般によくみかける仏教の諸尊を単独に、またこれに脇侍や眷属を配して描いた尊像画と、仏教の説話や伝説、あるいは経典の内容などを描いた仏教説話画などがあり、教派・信仰別としては、密教・顕教・浄土教・禅宗などに分類されます。ふつう仏画の種類といいますと、上記のうち教派・信仰別分類を主として、これに主題別の分類をも併用するのが通例となってい



蘇悉地儀軌手契図　　大津市石山寺蔵

ますが、仏画の種類はこれを類別する立場のちがいによって、幾通りにも分けられるということです。

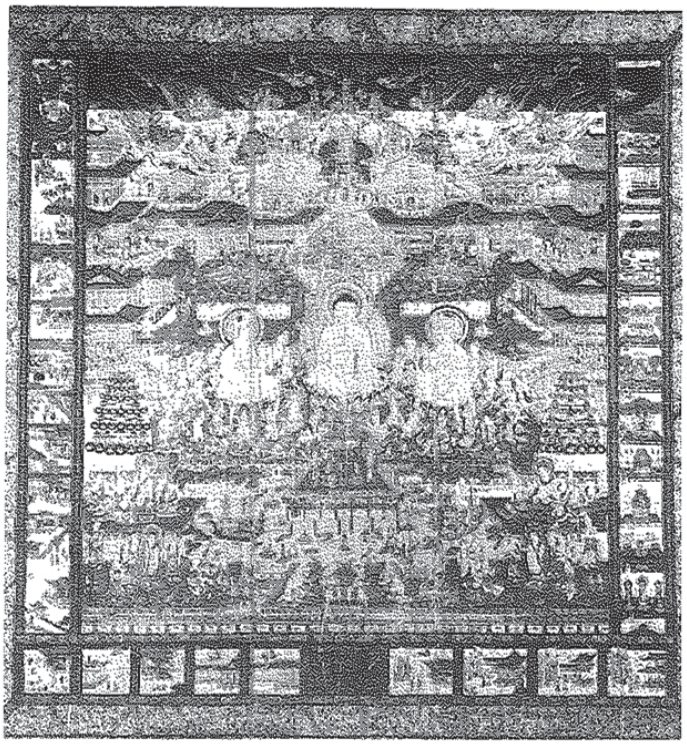
近江の仏画の種々相

近江に現存する仏画の種類をみてみますと、やはり密教系絵画がその多くを占めています。それは、比叡山を中心に天台密教（台密）が、石山寺を拠点に真言密教（東密）が隆盛をきわめ、まさに密教文化一色の様相を示した近江の平安時代以降の所産です。密教絵画は、最澄・空海らの入唐求法によってもたらされ、つづく円仁・円珍らによってさらに発展をみ、密教隆盛とともに、その修法の本尊像としての需要の多さも手伝って、大陸などからの請来本の転写が盛んに行なわれました。しかし、その後の相次ぐ戦火などのため、比叡山を中心にその大半を失ったことはまことに残念ですが、幸いそういった難をまぬがれた仏画の優品が、県下各地に散在しています。特に智証大師円珍を開祖とする園城寺（三井寺）に、その請来にかかわる数数の遺品がのこされており、その中でも五部心観（国宝・唐時代）は、密教の根本理念をあらわす両界曼荼羅のうち、金剛界曼荼羅の諸尊を一列にならべて描いた巻子本で、円珍が入唐したとき、その師法全より授かったものの原本で、近江に伝わる唯一の請来品です。一方石山寺には、入唐僧宗叡の請来した蘇悉地儀軌手契図（重文・教王護国寺蔵）を平治元年(1159年)に写したものが伝えられていますし、園城寺と延暦寺に伝わる不動明王八大童子像（ともに重文・鎌倉時代）は、円珍が請来したものの写しです。密教絵画の中で忘れてならない遺品に、園城寺に秘仏として伝わる黄不動尊（国宝・平安時代）があります。この画像は近江のみならず、我国の密教絵画の最高傑作といわれ、日本三不動の一つに数えられる高名な像です。力士をおもわせるような筋骨隆々とした個性的な像容を示し、その制作も９世紀末から10世紀にかけてといわ

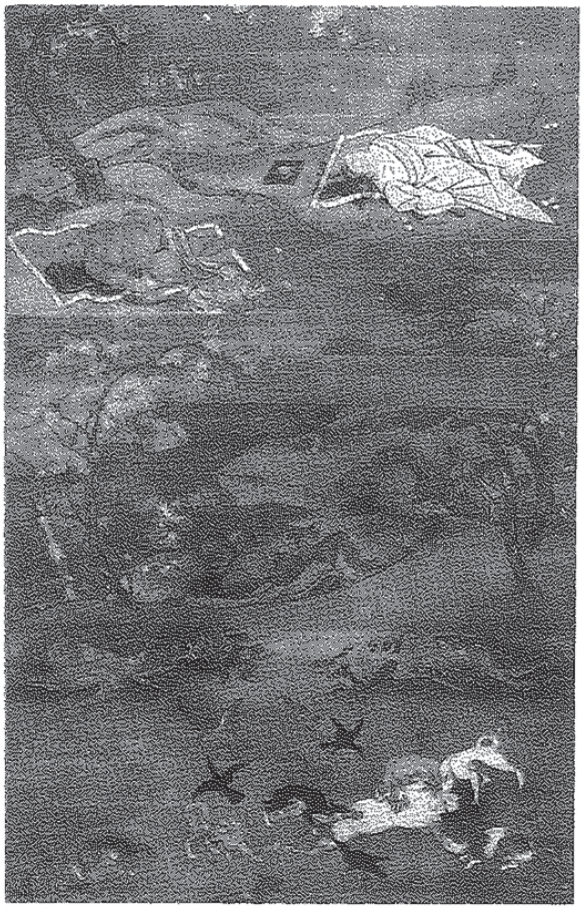
愛染明王像〔部分〕　長浜市総持寺蔵

黄不動尊像　草津市観音寺蔵

れており、密教絵画の発展を考える上で、非常に重要な位置にある作品といえます。この黄不動尊の模写は、京都曼殊院本（国宝・平安時代）をはじめ盛んに行なわれ、近江にも多く残されています。観音寺本（重文・鎌倉時代）が最も古く、次いで延暦寺本、百済寺本、舎那院本などが知られ、いずれも鎌倉時代から室町時代にかけての制作ですが、円珍感得の根本霊像として、天台系寺院を中心に広く崇拝されたことを裏づけています。そのほかの密教絵画としては、まず両界曼荼羅図をあげることができます。金剛界・胎蔵界の二部よりなる両界曼荼羅図は、密教の到達した最高の仏教理念を説いた大日経・金剛頂経にもとづいて描かれたものです。いずれも密教における絶対的な仏である大日如来を中心とする大宇宙の中に、あまたの諸尊をめぐらしたもので、金剛界は密教の智の世界、胎蔵界は理の世界をあらわしています。ですから、密教の修法には欠くことのできないものとして天台・真言を問わず重要視されてきたものです。また密教は超人間的な仏格として、多面多臂多足などの諸尊を生み出しました。千手観音・十一面観音・如意輪観音をはじめ、不動明王に代表されるような忿怒相をもった明王部の諸尊は、密教画とよぶにふさわしい雰囲気をもっています。密教寺院における修法の際に、護方神として道場の四方にめぐらされる十二天像もまた密教画の代表的なものです。



観経変相図　　草津市観音寺蔵



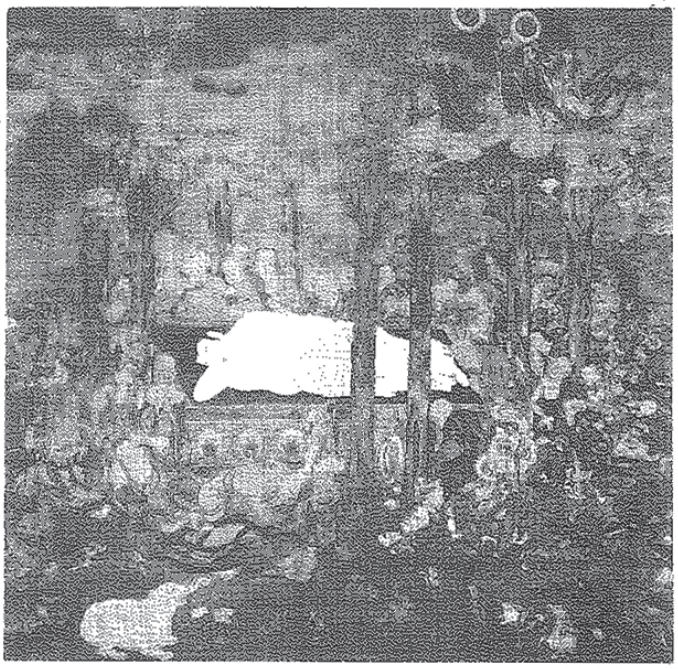
六道絵〔人道不浄相図〕　　大津市聖衆来迎寺蔵

密教絵画に次いで重要な位置を占めるのが浄土教絵画です。浄土教の祖といわれる比叡山横川の恵心僧都源信の著わした『往生要集』は、多くの経論の中から、地獄・極楽の有様をぬきだして、極楽に往生するには念仏によることを説いています。この所説にもとづいて、多くの浄土教絵画が描かれていますが、その代表的なものとして、聖衆来迎寺所蔵の六道絵（国宝・鎌倉時代）をあげることができます。六道絵とは、六道すなわち地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天の諸道における無常と、六道を輪廻するさまを描き、極楽浄土へ往生すべきことを説く説話画の一種で、

阿弥陀二十五菩薩来迎図　　大津市新知恩院蔵

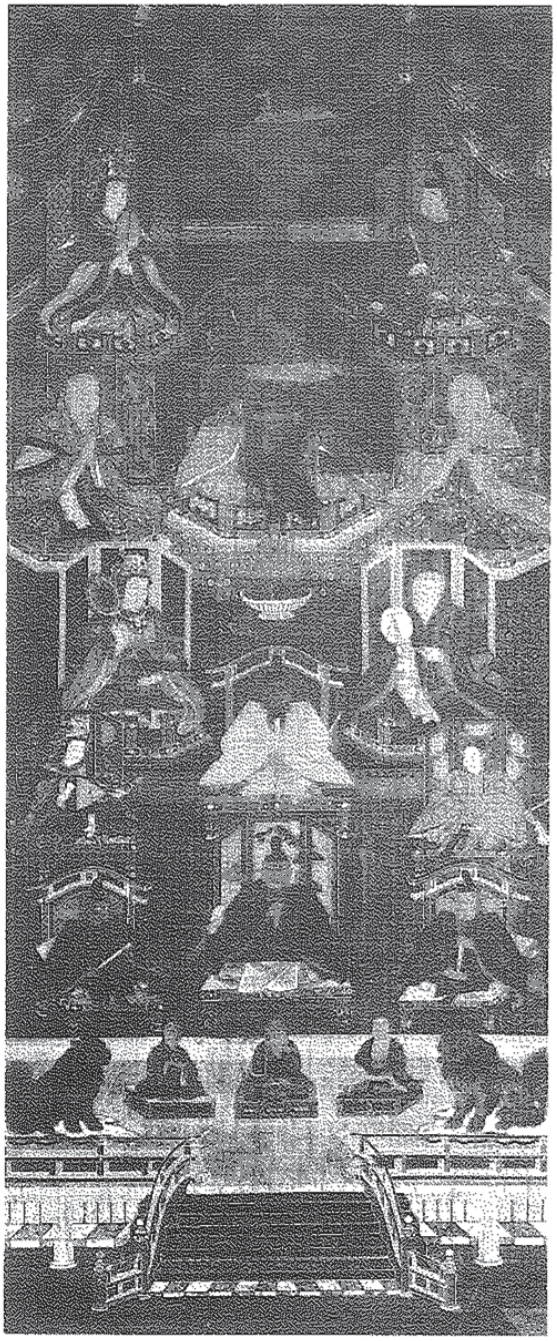
浄土教の隆盛とともに、その教化用として広く普及していきました。聖衆来迎寺蔵六道絵は、『往生要集』そのままを絵画化したもので、第一章「厭離穢土」（けがれた世界をきらい離れること）を中心に、第七章「念仏利益」などからの図を加えて、全15幅からなります。特に地獄道４幅は凄惨をきわめ、見るものを恐怖せしめるに十分な写実性豊かに描かれており、我国の浄土教絵画の筆頭にあげられるべきものです。また、念仏往生を願う心より生まれた来迎思想は、阿弥陀如来を中心に弥勒・地蔵菩薩などによる来迎図を生みだしました。これらの像は、浄土に生まれかわるための礼拝像として信仰されたものです。阿弥陀来迎図の場合、独尊像・三尊像さらには諸尊を従えて、七・十五・二十と増幅され、来迎図といえば、阿弥陀二十五菩薩来迎図といわれるほど有名な一つの様式に定着していきましたが、その過程は必ずしも明確ではありません。独尊像の遺品としては宝厳寺本（重文・鎌倉時代）があり、「迅雲弥陀如来」とよばれる西教寺本（重文・鎌倉時代）は、その名のとおり、遠近法をたくみにつかって、スピード感あふれる特異な来迎図です。また新知恩院本（重文・鎌倉時代）は、二十五菩薩来迎図の典型を示すものです。上述の六道絵・来迎図などとともに、教化を目的とした説話画の種類にわけられるものに、浄土曼荼羅または浄土変相図などがあります。観経変相図は、『観無量寿経』（釈迦が韋提希夫人に阿弥陀とその浄土の荘厳を説いたもの）の所説にもとづいて、極楽浄土の光景を絵画化した浄土変相図の一種で、奈良当麻寺に伝わるものを原本とするため、俗に当麻曼荼羅とよばれています。

一方顕教絵画（釈迦の教えを中心に、その一代記を原点として展開された世界）をみてみますと、釈迦独尊像・三尊像をはじめ、大般若経を転読（全部読まずに略読）する大般若会の本尊とされる釈迦十六善神図などがあり、釈迦如来の両脇侍として知られる文殊菩薩・普賢菩薩も、それぞれ独尊で描かれることもあります。釈迦の一代記の中では、圧倒



仏涅槃図　　安曇川町正法寺蔵

的に涅槃図が多く描かれています。涅槃図は、釈迦が沙羅双樹の下で仏弟子や動物たちの悲しみの中で、入滅する光景を描いたもので、２月15日の釈迦の命日に行なわれる涅槃会の本尊としてかざられるものです。その中でも正法寺本、石山寺本（ともに重文・鎌倉時代）などがすぐれています。また釈迦の教えをといた法華経にもとづいて描かれた三月経曼荼羅などもありますし、法華経を中心とした装飾経の下絵や見返し絵などにも見るべきものがあります。



山王権現像　　安土町浄厳院蔵

仏教と日本固有の神道とが結びついて神仏習合思想が生まれ、仏菩薩が日本では、かりに神の姿になってあらわれるという本地垂迹説によって、垂迹画も多く描かれています。近江においては、やはり日吉山王の諸神を描いたものが最も多くのこされています。それは、比叡山または天台宗の護法神としての日吉山王神の信仰の広さを物語っているといえるでしょう。この日吉山王の諸神を描いたものを日吉山王曼荼羅といいます。日吉山王曼荼羅はその形式上から、密教的な曼荼羅に準じた構図をもつものと、浄土教的雰囲気をもつものとの二つに大別されます。西教寺本、浄厳院本（ともに重文・鎌倉時代）などは前者を、百済寺本（重文・鎌倉時代）は後者を代表する日吉山王曼荼羅です。また、園城寺を開いた智証大師が唐から帰国する途中、船中にあらわれた神を寺門一宗の護法神としてまつった新羅明神も、近江における特徴的な神像といえます。

また、各宗派の祖師や高僧を描いた高僧像は、単なる肖像画というよりも、その徳を尊崇するための礼拝画として、仏画の中で重要な位置を占めています。

むすび

以上、近江の仏画についていろいろとみてきたわけですが、仏教大国近江にふさわしく、仏教を荘厳するために発展した仏教美術の中で、仏像とともに仏画の果してきた役割は、大へん大きかったように思われます。

なお、仏画に関しては、のべることがまだ多々ありますが、概述してきましたように、おおまかですが少しは理解していただけたと思います。仏教が日常生活から離れつつあるような現在、仏画のもつ魅力はかえって新鮮であるかも知れません。そして仏画は、これに関する予備知識をもつことによって、われわれから縁遠い存在ではないということが、おわかりいただけるものと思います。

（上野良信氏提供）